

授業の際の 自立活動的な配慮事項

ー自立活動部からー

これは、本校の職員に向けてまとめたものです。

主に「視覚的な配慮事項」「発音・発語・聴覚活用についての配慮事項」「言語指導についての配慮事項」の3項目からまとめました。もちろん、これが全てではありません

発音誘導の際に参考となるように、調音部位図、発音サイン一覧、発音サインの解説、口形文字一覧もつけてあります。

なお、発音サインはほとんどは以前本校で使用していたキューサインを取り入れていますが、発音「ン」は、そのサインでは発音要領と結び付けにくいと考え、通鼻音であることとナ行、マ行と区別できるようなサインとしました。

<視覚的配慮事項>

項目	内容
教師の立ち位置	<p>◇教師の口形、表情は言葉を理解する上で大きな手掛かり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子ども達に背を向けて話さない。 ・歩きながら話さない。 ・子どもとの距離が近すぎると見にくい角度になるので距離の取り方に気を配る。 ・光線を背にししない。(逆光で見にくい) ・子ども達全員から見えやすい位置に立つ。
読話	<p>◇相互読話</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子ども同士の口形や手話が見えるように机を馬蹄形に並べる。 ・発言する子どもに注目するように促す。 ・友達が話した内容を再確認する問いかけも行う。 (例:「今〇〇さんは、何とお話ししましたか?」) ・集会等では、発表者を前に出す等し、子ども達が注目しやすく読話しやすい場面作りを常に心掛ける。
板書の仕方	<p>◇授業の流れが分かる板書</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習内容が分かるよう学習の主題を提示する。 ・目当て、まとめ、課題などの書き方や色の使い方を学部や教科で統一する。 ・事前に板書計画を立て一見して学習の過程が把握できるような板書にする。 <p>◇注目を促す工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・覚えてほしい語句は、板書したものを部分的に消して視線を集め、何度か復唱を求める。 ・文字カードや実物を提示する場合、最初から全部見せずに「穴埋め」や「伏せ字」にし、他の部分を予想させるなど興味を持って注目できるようにする。 <p>◇見やすい板書の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話し言葉が音情報として受信しにくい場合は、書いて明確にする。 (例:口形が変化しない語 「地域」等) ・実態に応じて、分かち書き*1、助詞を○で囲む*2、拗音等をスラーで表し*3、読みの手掛かりとする等の工夫をする。 ・見えやすい字の大きさ、色の使い方を。子どもの席から見て適切か確認することも有効。 ・特に重要語句などは必ず字を提示して正しく書けるように促す。指で空間に書く空書も有効。 ・板書事項を訂正する時は、なぜ誤ったのかが分かるように誤りを消さずにその横に訂正文字を書く。 <p>◇板書の量やタイミング</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発言をすぐ板書するのではなく、相互読話の場面を確保し、発言をみんなまで受け止め、話し合ってから板書する。

*1：分かち書き

文節ごとに区切ることによって、言葉としてのまとまりに気付くことができる。

自分の ニュースを わけを つけて 話せるようになりましょう。

*2：助詞に○をつける

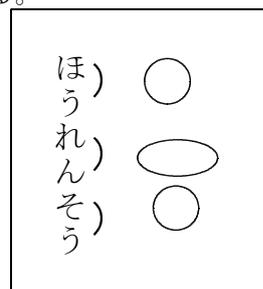
獲得が難しい助詞に○を付けて示すことで、着目し、主語につける助詞、場所につける助詞などに慣れることができ、助詞の使い方への理解を促すことができる。

らくだ(は) 雨(の) 降らない暑い砂漠(を) 旅すること(が) できます。

*3：スラー ⇨

拗音(「きゃ」等)、撥音(「ん」等)、促音(「っ」等)、長音等(「ほう」等)

は、文字で確認する際に、縦スラーのような記号や口形文字を使ってわたりを確認する。



項目	内容
教材の提示・掲示	<p>日本語と結びつけ理解し定着する</p> <p>◇全員が同時に見ながら授業を進めることができるための工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・図や表を活用する。 ・実物投影機やプロジェクターを使用する。 ・教材文を模造紙に書いて拡大する。 ・デジタル教科書を活用する。 <p>◇視覚的情報の整理</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子ども達が自ら目にして振り返ったり、様々な場面で取り上げて定着を図ることができるように、行事、学習内容、既習内容等の教材を掲示する。 ・掲示する際は、テーマやまとまりを考え、分かりやすいように整理する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>言葉の定着を促す掲示の例</p> <p>【黒板の左側】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・黒板の左側にテープ等を貼って場所を確保し、定着を促したい言葉や表現を気付いた教師が書き込み、教師間で共有し、意図的に取り上げる <p>【短冊】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・黒板の左側でほとんど定着できてきた言葉は、教室右側等のスペースに針金（ひも）を貼って短冊にする。時々取り上げ、確実に定着できているか確認する。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・情報が多くなりすぎないように、時期、季節、量等を考えて掲示する。
写真、絵、実物	<p>◇活用のタイミングを考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話だけでは分からない場合に実物、絵カード、写真カード等でイメージと言葉を結び付ける。 ・日本語の読み取りを優先させる場合は、最初から提示せず、確認や理解の手助けの目的で後から提示する。または、あえて提示しない。 ・子どもとのやり取りの中で手話だけでなく、確実に分かりあえる手段として適宜、活用する。
手話や身振り	<ul style="list-style-type: none"> ・難しい言葉や文章、抽象的な表現の意味理解を促す。 ・日本語の意味に合った手話単語を選択して、音声を付けた日本語対应手話で指導する。 ・助詞や文法の理解の手助けになるよう空間や方向を工夫した手話表現を行う。 ・手話と日本語は異なる言語であることを意識し、指文字や文字での音韻の確認を忘れない。 ・物を持ちながら手話を行わない。
ノートの書き方	<ul style="list-style-type: none"> ・内容ごとに行をあける。 ・色を使って見やすくする。 ・板書以外にも自分の気付きや考えを書き込む。 ・付箋を使用する。 ・一文字ずつ写さず、文節や文レベルで覚えてから書く習慣をつける。 ・子どもの実態に合わせてワークシートにする等、書く量を調整する。

<発音・発語・聴覚活用についての配慮事項>

項目	内容
注視	<ul style="list-style-type: none"> 子ども達の視線を教師に集めてから話し始める。 発言する子どもに注目するように促し、必要に応じて相互読話を促す。 文字カードの提示の際も初めから全部見せずに「穴埋め」や「伏せ字」にしたり、一部を見せて他の部分を予想させたりする等、興味を持って注目するような提示の仕方をする。 プリントは最後に配るか、裏返して前を見るように促すかして、話をしている教師に視線を向けるようにする。
読話	<p>◇相互読話</p> <ul style="list-style-type: none"> 子ども同士の間隔や手話がわかるように机を馬蹄形に並べる。 発言する子どもに注目するように促す。 集会等では、発表者を前に出す等、相互読話ができる環境に配慮して注目や読話を促す。 友達が話した内容を再確認する問いかけも行う。 (例:「今〇〇さんは、何とお話ししましたか?」) <p>◇分かりやすい話し方</p> <ul style="list-style-type: none"> 初めに話の全体を説明する等して見通しが持てるようにする。 子どもの言語力に合わせて、話す文の長さに注意する。(長すぎると読み取りにくい)。 抑揚も手掛かりとなるので、自然なイントネーションを大切に、1音1音区切って話さない。 口形ははっきりと(誇張しすぎない) やや大きめの声で、ゆっくり目に話す。
音環境の整備	<ul style="list-style-type: none"> 騒音計などで騒音の状態を確認する。 チャイムが鳴っている間は、原則として話をしない。 <p>◇補聴器等の管理</p> <ul style="list-style-type: none"> 毎朝、補聴器の点検をする。子どもの実態に応じて自分で行うように習慣づける。 人工内耳についても子どもの実態に応じて、電池の確認やコイルチェッカーでの確認を行う。 補聴器のハウリングはそのままにせず、子どもに伝えて正しく耳に入れるようにする。(必要に応じて再作や新しく作る等の処置を行う)
集団補聴システムの活用	<ul style="list-style-type: none"> 補聴援助システムの確認をする。 (マイクの装着、HAのスイッチの切り替え、赤外線レシーバー、アンプ、モニターイヤホンでの作動確認 *詳細は、別冊子「自活部からの確認事項」参照) 補聴器・人工内耳や補聴援助システムが正しく作動しているか簡単なききとりをルーチンで行う。 子どもがお互いの声をきけるように発言の際にマイクを向ける。
聴覚活用	<ul style="list-style-type: none"> 実態に応じて音声をきき取る場面を設け、子どもに表現を求め、正しい言葉(文)を教師が文字や指文字等で提示する等して、フィードバックの機会を作る。 子どもの音の気付きを取り上げ、何の音であるか伝え、音の意味を理解させるとともにオノマトペで言語化を図る。
発音・発語	<ul style="list-style-type: none"> 既習音が誤音化した場合は、正しい音と誤り音を提示し、子どもが意識できるように伝え、発音要領が想起できるよう発音サインを使って誘導する。(*文字や指文字は、発音要領とは結び付いていないので発音を誘導する際は使用しない) 音で矯正できたら語や文に戻って、再度話すようにする。 音韻数、口形、イントネーションに注意して、一人で話ができるまで行う。(口形が伴わないと、読話力や発語に力につながっていかない。) (口形があいまいな場合は口形文字を使用することも有効) (実態に応じて、最低限でも母音部の口形を付けて発語するように誘導する。例:「あさ」/asa/→最低限でも「ああ」/aa/ ×「あえ」/ae/) 肩をたたく、手をたたく等してリズムを意識できるようにする。 発音明瞭度検査の結果や個々の発音の傾向等、職員で共通理解し、実態に応じた指導を行う。(実態によっては、各音の明瞭さを求めるのではなく、教育活動の中で声の安定、リズム、口形の安定を中心とする) 手指を使って文節数や助詞を意識させながら口声模倣を促す。

*発音サイン、口形文字については、参考資料を参照のこと。

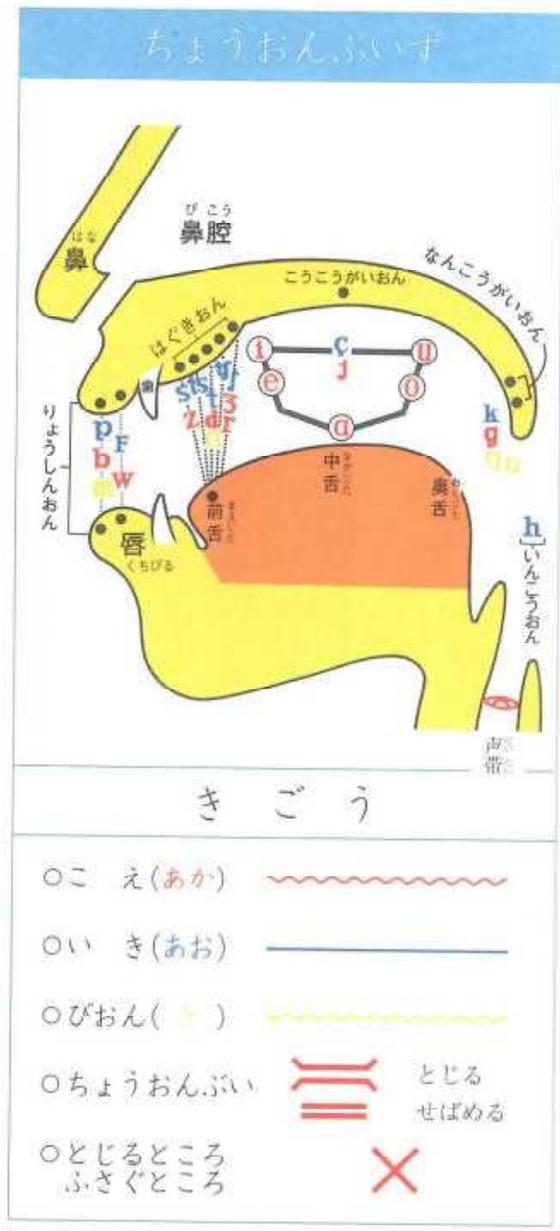
<言語指導についての配慮事項>

項目	内容
語彙・表現の拡充	<p>◇意味や場面と結びつけながら意識的に様々な表現を取り上げる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・類義語や意味がほぼ同じ別表現等を大いに活用する。 (例：数学 動かす→ずらす) ・1時間の板書計画とは別に、語彙や表現の拡充をねらった板書スペースを確保し、活用する。(※<視覚的配慮事項>「言葉の定着を促す掲示の例」参照) ・いつも同じ表現ばかり使わず、常に「一つ上の段階」の言葉を意識して指導する。(例：使う→使用する) ・新出語句や難語句、多義性のある言葉等は意識的に取り扱い、意味に合う状況を作る等して指導する。 (意味が理解できないと予想される言葉は、あらかじめ身近な例文を示す等の準備をする) ・教科に関する用語や表現は、視覚的な手掛かりを使い、概念が把握できるようにすると共に「ルビ」「空書」「指文字」等を使い、読みもきちんと押さえる。 ・定着しにくい語句は、教室掲示等をしながら様々な機会に取り上げ、汎化を図る。(※視覚的配慮事項「掲示」の項目参照) ・子どもの表現は、文に拡充模倣して押さえる。 ・名称だけでなく関係する事柄と結び付けて押さえることで言葉のイメージを広げる。 (例：うさぎ 耳が長い、ぴよんぴよん、すばしっこい、とびはねる、動物、かわいい、お月見等)
思考を育てる	<p>◇発問の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実態に応じ、一問一答式の発問はできるだけ避け、考えなければ答えられない発問を主にしながら授業を展開する。 ・ある一人の子どもへ質問をしながら全員に考えさせる、一人の答えであってもクラス全員で考える態度を養う。 ・問いが難しい場合を予測して、補助質問を準備したり、考えを進める筋道を示したりして、正しい答えに達するよう工夫する。 <p>◇学習展開の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの相互読話(手話によるコミュニケーションを含む)、相互思考を図りながら子ども主体となった話し合い活動を中心に捉えた展開を図る。感情や思考を大切に、活発なやり取りを心掛ける。 ・子どもから質問が出るような展開をする。
読む	<ul style="list-style-type: none"> ・文を読む活動や機会を作る。(それぞれの目的に応じて音読、手話で読む、指文字、黙読、暗記、群読、追読等を取り入れる) ・文節を意識して読めるよう、実態に応じて分かち書きを取り入れる。 ・読む場所をはっきり掲示し、行をとばさないように指でなぞったりしながら読む。 ・読んだ後、意味のわからない言葉を確認する。

項目	内容
理解	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが本当に理解したか確認する「押さえ」を大切にする。 (× T「分かりましたか？」 S「はい」) (○ T「～とはどういうことでしたか？」 S「～です」) ◇特に算数の文章問題で有効 ・問題文のキーワードとなる箇所に下線を引くようにし、読み取りの手がかりとする。 ・キーワードを意識して立式の手がかりとする。(「合わせて」は足し算、「分けた」は引き算等) ・文を読んだ後で絵を描く等して、どのようなイメージを抱いたかを確認する。 ◇文章の読解 ・子どもの実態に合わせて劇化(動作化)を取り入れ、文章の意味が理解できているか確認する。特に物語文では会話の場面では、誰が話しているのかの確認をする。また、心情のイメージをつかむことにつながるように登場人物の表情を想像する。
書く	<ul style="list-style-type: none"> ・1時間の中で意図的に書く時間を設定する。(活動内容、考察、感想等) ・文に適する言葉を考える機会を設ける。(助詞、接続詞、語形変化等) ・子どもの考えている文が正しいか書く活動を設けて確認する。 ・表記や文法が正しい文を書いているか確認する。
話す	<ul style="list-style-type: none"> ◇きちんと話す習慣をつける ・子どもの自由な表現を受け止めながらも実態に応じて発言しやすいよう、意見、質問、感想、反対等の基本的文型や学習の進め方をパターン化しておく。更に言語力の拡充に伴い、意識的にパターンを変え、応用力をつけていく。 (例：～だと思えます。理由は→ ○○だから～だと思えます) ・発言が単語のみで終わることがないように、日頃から主述のはっきりとした文で話す習慣化を図る。助詞の誤用は指文字等を使いながらその都度訂正する。

***参考資料 1** <発音指導をする上で各音の調音部位、調音法を理解することは大切>

- (1) おんき
 きほん れんしゅう
 ○ あご…かたい ものを しつかり かみましよう。



たんおんひょう

調音部位	調音法	なまえ きかん	両唇音	歯の音	歯茎の音			硬口蓋の音	軟口蓋の音	喉の音
					歯の裏 舌先	前歯茎	中歯茎			
鼻音	通鼻音	有声音	m			n	ɲ		ŋ	
	破裂音	無声音	p			t			k	
子音	有声音	有声音	b			d			g	
	弾音	有声音						r		
口音	破裂音	無声音			ts ツ			tʃ チ		
	有声音	有声音			dz ツ			dʒ ジ		
音	摩擦音	無声音		s				ʃ		
	有声音	有声音		z				ʒ		
母音	無声音	無声音	F					ç ヒ		h
	有声音	有声音	W					j ヤ		
								i	u	
								e	o	
								a		

引用:「ただしいはつおん」大阪府立生野聾学校編

***参考資料2**
<発音サイン一覧>

本校で以前「キュードスピーチ」を取り入れていた当時のサインを取り入れている。「ン」は、そのサインでは、発音要領と結びつけにくいと考え、通鼻音であることとナ行、マ行と区別できるようなサインとした。

あ行				
	人差し指の腹を顎につける		手の平を下にして顎の下につける	そのまま前に出す
さ行				
	手の平を下に人差し指の側面を顎につける	そのまま前に出す	手の平を相手に向けて立てる	おいでのように軽く曲げる
な行				
	人差し指を小鼻につける	そのまま前に出す	手の平を手前にし下唇の前に立てる	そのまま前に出す

ま行				
	手の平を軽く鼻につける	そのまま前に出す	人差し指を横向きにして口元につける	そして小さな半円を描く
ら行				
	手の平を手前に向け指先を軽く曲げる	曲げた指を伸ばす	人差し指を手前に向けて口を指すようにする	そのまま前の方にはなす
ん				
	親指を小鼻につける		「か」のキューを人差し指一本とする	

さ 行			だ 行		
	「さ」のキューを人差し指一本 でする			「た」のキューを人差し指一本 でする	
は 行			ば 行		
	人差し指を立て 指先を唇につけ る			前方にはなす	手を軽くにぎる ぱっと開く
か 行			き 行		
	「か」の構えか ら			真横に引く	「が」の構えか ら 真横に引く

し ゃ 行			じ ゃ 行		
	「ざ」の構えか ら			真横に引く	「ざ」の構えか ら 真横に引く
ち ゃ 行			に ゃ 行		
	「た」の構えか ら			真横に引く	「な」の構えか ら 真横に引く
ひ ゃ 行			び ゃ 行		
	「は」の構えか ら			真横に引く	「ば」の構えか ら 真横に引く

*平成17年9月1日「全校研修会」資料から

* 参考資料3

発音サインの解説

(1) 母音(ア行) [a i u e o]

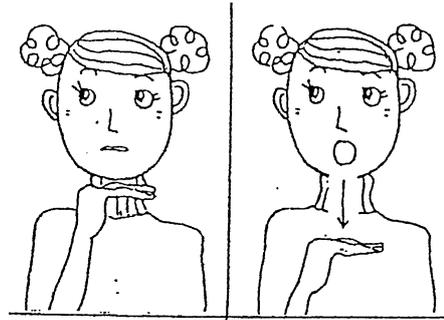
母音は子音がなく、口を開いてそのまま声を出す有声音。発音指導では声の響きを感じるために喉や頬に手をあてる。また、母音の口形を意識することが大切。唇や顎の動きに注目できるように顎に人差し指をつける発音サインとする。



人差し指の腹を顎につける

(2) カ行/ k / [ka ki ku ke ko]

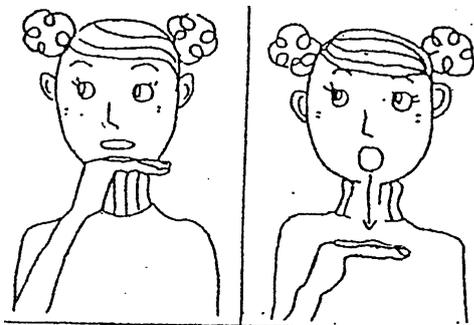
カ行の子音 k は、奥舌を軟口蓋に密着させ、息を閉め切って、急に破裂させて出す無声子音。その要領を暗示させるように手を喉のところにあてて前に出す。



手の平を下にして顎の下につける	そのまま前に出す
-----------------	----------

(3) サ行/ s // ʃ / [sa ʃ i suw se so]

上下の歯を軽く合わせ、舌尖を下歯裏に軽くつけ、前舌と上歯茎裏にかすかなすき間をあげ、そこから息を出すことにより摩擦を起こして無声子音 s を出す。発音指導では、手を下唇にあてて息を触感させる。発音サインも摩擦の息が出る様子を暗示するように手を下唇にあてて前に出す。シ音の ʃ は、調音部位が多少違うがサインはサ行に含める。

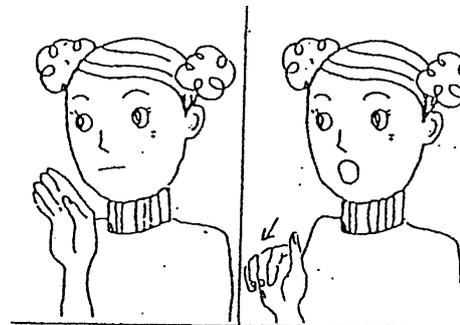


手の平を下に人差し指の側面を顎につける	そのまま前に出す
---------------------	----------

(4) タ行/ t / [ta tʃ i tsuw te to]

前舌を歯茎に密着させ、息を閉めきり、急に破裂させながら吐き出すと無声子音 t が出る。この時の舌の動きを表すように手を口の横で何かをたたくような動作をするとタ行音のサインになる。

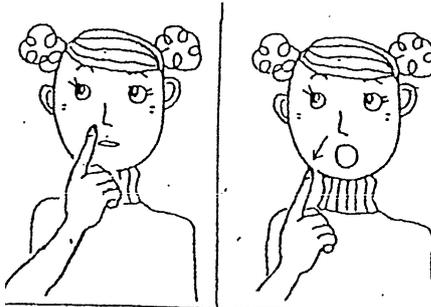
tʃ音と tsuw音は、破裂音ではなく破裂と摩擦の両方を備えた破擦音で性質が違うがサインとしてはタ行音として扱う。ta te to よりも少し弱めにサインする。



手の平を相手に向けて立てる	おいでのように軽く曲げる
---------------	--------------

(5)ナ行/ n / [na ni nu ne no]

前舌を上歯茎に密着させ、息を鼻から出しながら同時に声を出すと有声子音 n が出る。鼻を通る音なので通鼻音という。サインは鼻から出る音であることを意識させるため人差し指を鼻翼にあてる。

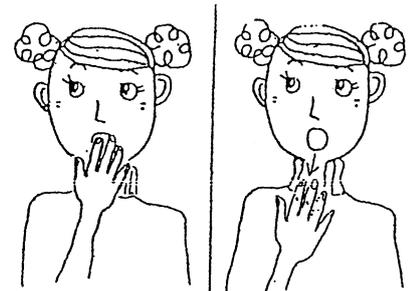


人差し指を小鼻につける
そのまま前に出す

(6)ハ行/ h / / F/ [ha çi Fuu he ho]

口を開いて声門から息を吐き出すと暖かい息が出る。この時の摩擦音が無声子音 h である。窓ガラスや鏡を吹く時にハーと出す息の音が h である。

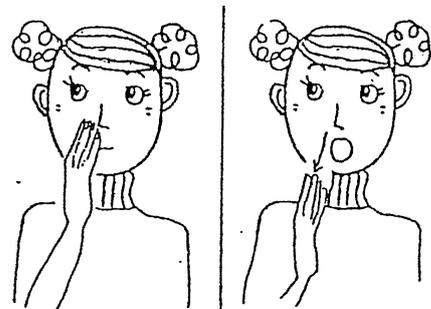
発音指導では息を手の平に感じさせる。その発音要領を意識できるように手の平を口の前にたて息を感じてから前に出す。ハ行音の中で Fu 音と çi i 音は調音部位が違う。特にF音は h音とは反対の涼しい息である。しかし、息を出しながら摩擦させるのでサインでは両方ともハ行音の中のものとして含める。



手の平を手前にし下唇の前に立てる
そのまま前に出す

(7)マ行/ m / [ma mi mu me mo]

マ行音 m は、両唇を閉じて、息を鼻から出しながら同時に声を出す。両唇閉塞はパ行音やバ行音と同じ。この音はn音と同じように鼻を通して出す音で通鼻音である。サインでは鼻から出る音であることを意識させるために手の平を鼻翼にあてる。



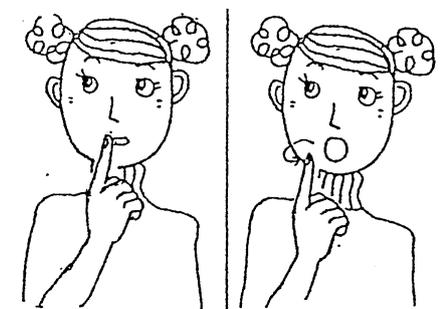
手の平を軽く鼻につける
そのまま前に出す

(8)ヤ行/ j / [ja ju jo]

j という子音に母音のア、オ、ウ音がついてそれぞれヤ音、ヨ音、ユ音になる。

j は母音のイ音に近い音である。「イ」と「ア」が一緒になってねじれる時にヤ音になり、「イ」と「ウ」が一緒になってねじれる時にユ音になり、「イ」と「オ」が一緒になってねじれる時にヨ音になる。j

は母音のイ音に近い音なのでサインも人差し指を口元につけ、ねじれる様子を半円を描いて表現する。



人差し指を横向きにして口元につける
そして小さな半円を描く

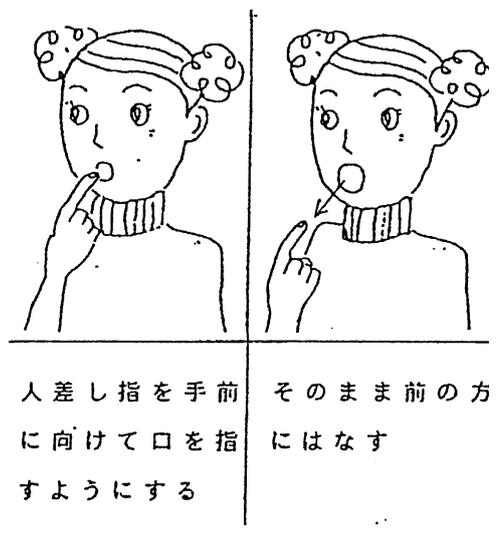
(9)ラ行/ r / [ra ri ru re ro]

舌先を硬口蓋の前部にかすかに反り上げる感じで接触させ、弾くようにおろすと同時に声を出すと有声子音 r が出る。その舌の動きを示すようにサインは手の平を手前に向け指先を軽く曲げ、曲げた指を伸ばす。



(10)ワ行/ w / [wa]

w はワ音の子音で有声子音。この w が母音 a と結びついてワ音になる。母音のウ音に近い口形から母音ア音へ大きく口形を開く。サインはこの口形の変化が意識できるように人差し指を口に向けてから前方にはなす。



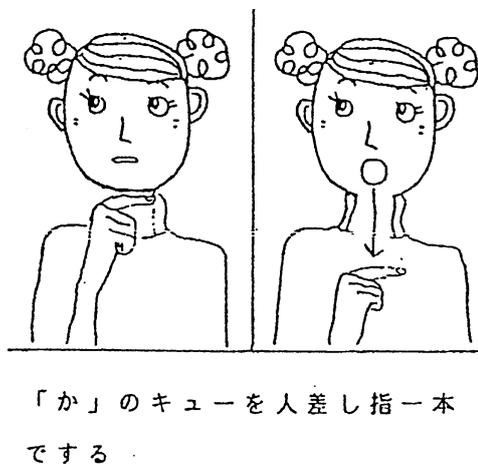
(11)撥音(ン音)[m n n] 等

ン音は後続する音によっていくつかに変化する。これらに共通するのは通鼻音であること。鼻音であること、ナ行、マ行と区別させるために鼻翼に親指をあてるサインとする。



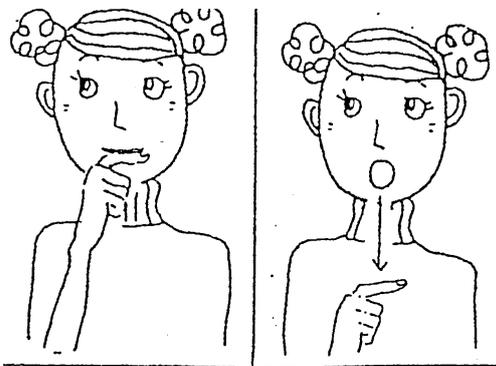
(12)ガ行 / g / [ga gi guu ge go]

カ行音の子音 k と同様の構えで声を出す。奥舌を軟口蓋に密着させて息を止め、次に息と同時に声を出すと有声子音 g が出る。ガ行音は濁音なのでカ行音のサインを人差し指1本で表す。



(13)ザ行音/z / [za zi zu ze zo]

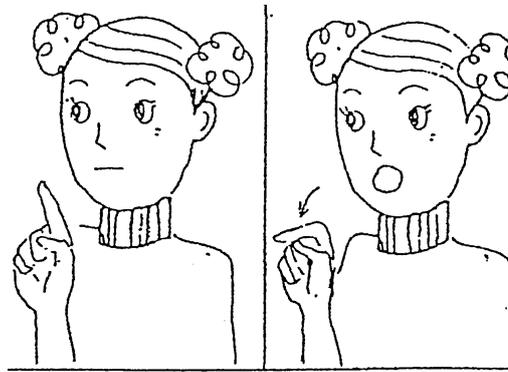
サ行音の構えで声と息を同時に出すと有声子音 z が出る。上下の歯を軽く閉じ、舌先を下歯茎裏に軽くつけ前舌と上歯裏に少しすきまをつくり、そこから息と声を同時に摩擦させながら出す。サインはサ行音のサインを人差し指であらわす。



「さ」のキューを人差し指一本でする

(14)ダ行音/d/ [da dzi dzu de do]

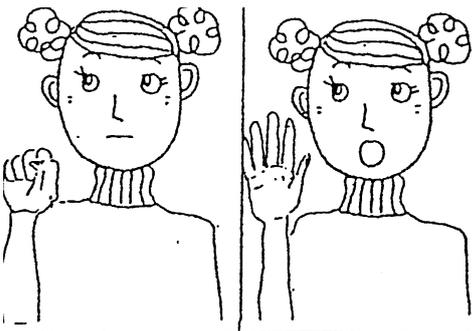
前舌を上歯茎につけ舌をはなすと同時に声を出す、有声子音 d が出る。タ行音の構えで息と声を同時に出す。サインはタ行音のサインを人差し指であらわす。



「た」のキューを人差し指一本でする

(15)パ行/p / [pa pi pu pe po]

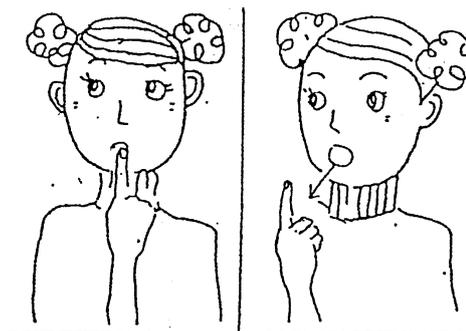
両唇を閉じて息を止め、息を破裂させるように出すと無声子音 p が出る。サインは破裂の様子が意識できるように手を軽くにぎってぱっと開く。b 行音より破裂の息が強い。



手を軽くにぎる ぱっと開く

(16)バ行/b / [ba bi bu be bo]

p 行音と同じように、両唇を閉じて息を止め、次に息と声を同時にやや弱く破裂させるように出すと有声子音 b が出る。



人差し指を立て 前方にはなす
指先を唇につける

(17)拗音(キャ行 シャ行 チャ行 ニヤ行 ヒヤ行 ミヤ行 リヤ行 ギヤ行 ジャ行 ビヤ行 ピヤ行)

基本となる子音のサインを基にしてそれを真横に引く形であらわす。

* 「口話サインと発音指導」 坂田午二郎・小野禎子著参考

***参考資料4**

★母音短音、母音長音、ヤ行音、ワ音は、口形の意識や音の渡りを意識する上で有効。本校では、これらを中心に活用するとする。全部の口形文字を使用するというわけではない。子ども自身がこの図の意味(発音要領)を理解できていない場合は使用しても意味がない。

バ行音	ダ行音	ザ行音	ガ行音	パ行音	ワ音	ラ行音	ヤ行音
バ	ダ	ザ	ガ	パ	ワ	ラ	ヤ
ビ		ジ	ギ	ピ		リ	
ブ		ズ	グ	プ		ル	ユ
ベ	デ	ゼ	ゲ	ペ		レ	
ボ	ド	ゾ	ゴ	ポ		ロ	ヨ
ビヤ		ジヤ	ギヤ	ピヤ		リヤ	
ビユ		ジユ	ギユ	ピユ		リュ	
ビョ		ジョ	ギョ	ピョ		リョ	

用		例	
い	せ	き	ろ
し	せん	し	が
ぐ	せい	く	が
ろ	せい	く	が
あ	か	く	が
き	か	く	が
ら	み	く	が

┌ = 長音に付ける記号。) = 撥音の時と、母音が並ぶ場合に付ける記号。

マ行音	ハ行音	ナ行音	タ行音	サ行音	カ行音	母音長音	母音短音
マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	アー	ア
ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イー	イ
ム	フ	ス	ツ	ス	ク	ウー	ウ
メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エー	エ
モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オー	オ
ミヤ	ヒュ	ニユ	チュ	シュ	キュ	拗音(ようおん)	
ミユ	ヒユ	ニユウ	チュ	シュ	キュ		
ミョ	ヒョ	ニョウ	チュ	シュ	キュ		
撥音 (はつおん)				促音 (そくおん)			
奥舌で 	口を開いて 	中舌で 		サ行音 	カ行音 	タ行音 	バ行音
お	ポ	お	ほ	い	ま	き	は
ん	ん	ん	ん	い	ま	き	は
な	な	な	な	っ	っ	っ	っ
	フ	さ	さん	さ	ち	て	は

図3 口形文字

いしぐろ・あきら著『学年的水準』より